

佐藤雅晴 尾行—存在の不在／不在の存在



【展覧会概要】

展覧会名：佐藤雅晴 尾行—存在の不在／不在の存在

会 期：2021年11月13日(土)～2022年1月30日(日)

開場時間：10:00～18:00(入場は17:30まで)

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

休 館 日：月曜日、年末年始(2021年12月27日(月)～2022年1月3日(月))
ただし1月10日(月・祝)は開館、1月11日(火)休館

入 場 料：一般900円、団体(20名以上)700円

高校生以下／70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※学生証、年齢のわかる身分証明書が必要です

※年間有効フリーパス →「年間パス」2,000円

学生とシニアのための特別割引デー「First Friday」

→学生証をお持ちの方と65歳～69歳の方は、毎月第一金曜日(12月3日、1月7日)100円

主 催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

助 成：芸術文化振興基金

協 賛：ソニーマーケティング株式会社

協 力：公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団・大分県立美術館、
株式会社ヤマハミュージックジャパン、株式会社川又楽器店、imura art gallery、
KEN NAKAHASHI、Estate of Masaharu Sato、サントリーホールディングス株式会社

企 画：井関悠(水戸芸術館現代美術センター主任学芸員)



【概要】

佐藤雅晴は、ビデオカメラやスチルカメラで撮影した日常の風景をパソコン上でペンツールを用い、なぞるようにトレースしてアニメーション化する、「ロトスコープ」と呼ばれる技術によって映像作品を制作してきました。東京藝術大学大学院美術学科絵画専攻修了後、ドイツに渡り、国立デュッセルドルフ・クンストアカデミーに研究生として在籍したのちドイツを拠点に活動、2010年に帰国し茨城県取手市に居を構えます。その直後に上顎癌が発覚、以後、闘病生活を送りながら制作に励んでいましたが、2019年3月、惜しまれつつも45歳で他界しました。彼の作品は、現代美術、映画、アニメ、メディア・アートの表現領域を越え、国内外で高い評価を得てきました。佐藤自らが撮影した身近な人々や身の回りの風景を忠実にトレースすることによって生み出される佐藤の作品には、現実と非現実が交錯する独自の世界観が描かれています。生前、佐藤はトレースという行為について、描く対象を「自分の中に取り込む」ことだと語っていました。それは、自身の暮らす土地や目の前の光景への理解を深め、関係を結ぶ行為ととらえることもできます。一方、佐藤の作品を見る私たちは、実写とのわずかな差異から生じる違和感や、現実と非現実を行き来するような知覚のゆらぎをおぼえます。人それぞれに多様な感情や感覚を呼び起こす佐藤の作品は、見ることの奥深さと豊かさを与えてくれるものといえるでしょう。

本展では、1999年に渡独し初めて制作した映像作品《I touch Dream #1》から、死の直前まで描き続けた「死神先生」シリーズまで、映像作品26点、平面作品36点の計62点を通じ、佐藤の画業を振り返ります。

【作家略歴】

佐藤雅晴（さとう・まさはる）

1973年大分県臼杵市生まれ。1999年東京藝術大学大学院修士課程修了後に渡独し、国立デュッセルドルフ・クンストアカデミーに在籍する。ドイツに10年間滞在したのち、2010年日本に帰国。以後、茨城県取手市を拠点に活動。2019年3月9日、同地にて逝去。

主な個展に「バイバイカモン」(imura art gallery、京都、2010)、「ハラドキュメンツ 10 佐藤雅晴—東京尾行」(原美術館、東京、2016)、「TOKYO TRACE 2」(Firstdraft Gallery、シドニー、2017)、「死神先生」(個展、KEN NAKAHASHI、東京、2019)。主なグループ展に「THE ドラえもん展 TOKYO 2017」(森アーツセンターギャラリーほか、2017-)、「霞はじめてたなびく」(トーキョーアーツアンドスペース、東京、2019)、「六本木クロッシング 2019 展：つないでみる」(森美術館、東京)、「DOMANI・明日展 2020 傷ついた風景の向こうに」(国立新美術館、東京、2020)、「ヨコハマトリエンナーレ 2020」(横浜美術館、プロット 48、日本郵船歴史博物館)、「距離をめぐる 11 の物語：日本の現代美術」(オンライン展覧会、2021)、「温情の地：震災から10年の東北」(コンボジット、メルボルン、2021)など。



Photo by Art Collectors'

【本展のポイント】

① 現存する佐藤の全映像作品を一堂に展示

本展では、現存する佐藤の全映像作品を一堂に展示します。1999年にドイツに渡り、初めて制作した《I touch Dream #1》(1999年)から、未完となった最後の映像作品《福島尾行》(2018年)まで、全26作品が60以上のスクリーンとモニターで展示される、過去最大規模の回顧展となります。



《I touch Dream #1》1999年
アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (SD、白黒、サイレント)
3分34秒



《福島尾行》2018年
アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー)、
自動演奏ピアノ、ループ

② 未発表の映像作品《SM》(2015年)を初公開

本展では、未発表であった《SM》を初めて展示します。同作品は、頭部のない下着一枚の男性が自身の首をつかみ、それを襦に打ちつける光景が延々と繰り返されます。この男性の姿からは、《東京尾行》(2015-2016年)制作のさなかにあった佐藤が感じていたであろう、ままたらぬ自身の身体へのもどかしさ、制作への焦燥感を感じ取ることができます。一方、《SM》と同じ年に制作された《3月》では、ひとつの画面上にいくつものシーンがマンガのようにコマ割りされ、それぞれのコマに描かれた風景が別々の時間軸を動き、時計の針は2時46分を永遠にまわり続けます。佐藤が過ごした2015年の3月の静かな一日が描かれたかのような、細やかな映像作品です。

この2作品が制作された2015年、佐藤は翌年に控えた原美術館での個展「ハロドキュメンツ 10 佐藤雅晴—東京尾行」において発表する、新作《東京尾行》の制作に取り組んでいた最中の夏に上顎癌が再発し、緊急手術を受けました。



《3月》2015年
アニメーション、
シングルチャンネル・ビデオ
(HD、カラー、サイレント)
ループ



《SM》2015年
アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー、サウンド)
ループ

③「死神先生」の部屋

佐藤は 2018 年 9 月に余命宣告を受けたのち、病状の進行に伴う視力の低下などにより映像作品の制作が困難になりましたが、その手を止めることなく、アクリル絵具による平面作品の制作に精力的に取り組みました。外出もままならず、老朽化による取り壊しが予定された自宅で静かに過ごす時間のなか、ふと目にとまった親しみのある光景—そんな瞬間を切り取り、パネル上に原寸大の絵としてトレースし制作されたのが、全 10 点からなる「死神先生」シリーズです。本展では、佐藤が最後に過ごした自宅を再現するかのように、当館現代美術ギャラリーの独立する展示室 9 にて展示します。



「死神先生」シリーズより《ガイコツ》2018 年
アクリル絵具、木製パネル



「死神先生」シリーズより《夜空》2018 年
アクリル絵具、木製パネル

【主な出品作品】

《TRAUM》2004-07 年

アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (SD、カラー、サウンド)、10 分 7 秒

日常風景をビデオカメラで撮影後、パソコン上でトレースし、ロトスコープ技法によってアニメーション化するという、佐藤の映像表現を確立した作品。2004 年から 2007 年まで、約 4 年の歳月をかけて制作されました。《TRAUM》とはドイツ語で「夢」を意味する単語で、佐藤が実際に見た夢からインスピレーションを得て制作されました。一人の青年がデュッセルドルフの街を走るトラムに乗り、ライン川沿いにそびえ立つライントワーへ向かい、展望台に辿りつくというストーリーです。

佐藤は本作において、自身が見た夢の光景と彼の暮すデュッセルドルフの街の風景を重ね合わせ、白昼夢のような世界観をアニメーションとして成立させようと試みています。



《TRAUM》2004-2007 年
アニメーション、
シングルチャンネル・ビデオ (SD、カラー、サウンド)
10 分 7 秒

《バインド・ドライブ》2010-11年

アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー、サウンド)、4分50秒

佐藤の住む茨城県取手市の情景を舞台に、天使と悪魔の姿をした男女が織りなすドラマ仕立ての作品。雨の降り続ける田んぼのあぜ道や古びた家並みなど、第二次大戦後に量産された郊外の風景を、鋭い観察眼と卓越した画力で描き出しています。

2010年に帰国した佐藤は、茨城県取手市に居を構えました。取手市に暮らし始めてから周りの環境を見つめ始めたところ、田舎で人も少ない、しかしそこに美しさを感じるようになったといいます。佐藤には、田舎の風景を一枚一枚重ねていくことで、映像作品でありつつも、次第にスクリーンの中で一枚の絵画を見ているような印象に落とし込みたいという思いがありました。



《バインド・ドライブ》2010-2011年
アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー、サウンド)
4分50秒

《東京尾行》2015-16年

12チャンネル・ビデオ (HD、カラー)、自動演奏ピアノ、ループ

《東京尾行》は、東京五輪に向け変わりゆく東京を題材にした作品で、12の映像に90もの東京の風景が映し出されます。そこには、2011年の震災を経て、オリンピックへ向け変わりゆく東京の風景と佐藤の日常が日記のように刻まれ、佐藤が尾行してとらえた東京の象徴的な場所や何気ない光景や気配が描かれています。

本作は、2016年に原美術館で開催された個展「ハロドキュメンツ 10 佐藤雅晴—東京尾行」に際して制作されました。佐藤は、この作品を制作していた2015年の夏に癌の再発がわかり、急遽、病巣であった上あごを全摘出します。しかしその後、転移が見つかり放射線と抗がん剤による治療が行われ、これまでのような制作が叶わなくなりました。

そのような状況で佐藤は、モチーフとなる対象のみをアニメーション化することで制作を継続する糸口を見つけます。それまではモチーフと背景すべてがアニメーションになっていましたが、本作以降、映像の一部だけがアニメーションとして描かれるようになりました。



《東京尾行》2015-2016年
アニメーション、12チャンネル・ビデオ (HD、カラー)、自動演奏ピアノ
ループ

《福島尾行》2018年

アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー)、自動演奏ピアノ、ループ

佐藤が闘病生活を続けながら半年かけて福島を何度も取材し制作した作品。佐藤は、癌を患ってから8年が経ち、2017年末に完治の見込みのないことが主治医より告げられ、余命を考え再び福島を訪れようと考えました。きっかけは常磐線が富岡駅まで開通したという毎日新聞の記事を目にしたことです。シングルチャンネルで全30シーンからなる本作でも、《東京尾行》同様に、映像の一部分のみをアニメーション化する手法をとっています。そこには地震と津波によって壊滅した福島の街が復興していく様子が映される一方、原



《福島尾行》2018年
アニメーション、シングルチャンネル・ビデオ (HD、カラー)、
自動演奏ピアノ
ループ

発事故によって今なお帰還困難区域に指定された地域には人影は見当たらず、生活の気配が感じられない風景も存在します。本作で佐藤は、駅の横に積み上げられているフレコンバッグや、除染作業を行う人々など、福島の日常を捉えています。

佐藤は《福島尾行》をライフワークにしようと考えていたようですが、2018年9月に余命宣告を受け、同作の制作中断を決意しました。その頃には片目が霞みだしトレース作業が困難になり、また撮影のために外出することもままならなくなっていました。制作中断から約半年後の2019年2月末、《福島尾行》は未完のままトーキョーアーツアンドスペース本郷で開催された展覧会「霞はじめてたなびく」で展示されました。

「死神先生」シリーズ

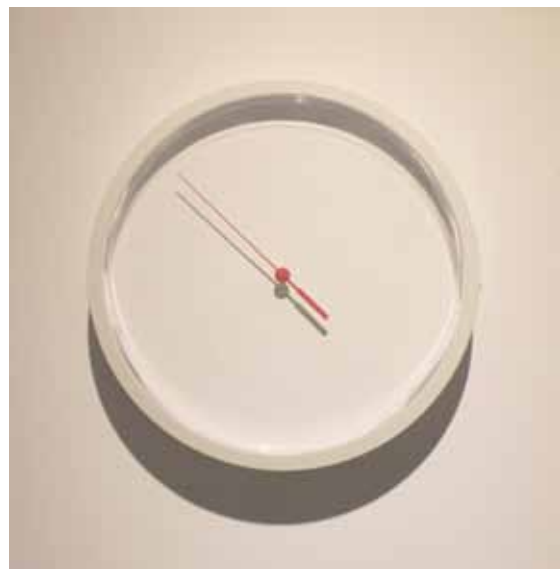
《ガイコツ》《チャイム》《コンセント》《スイッチ》《ダンボール箱》《浴室》《夜空》《ヤモリ》《階段》
《now》

計10点、2018年、木パネルにアクリル絵具、時計

「死神先生」シリーズは、佐藤が18年9月に余命宣告を受け、病状の進行に伴う視力の低下などにより映像作品の制作が困難になるなか制作したアクリル画のシリーズで、佐藤が自宅で静かに過ごすなか、目にとめた親しみのある風景を切り取り描いた9点のアクリル画と、1点の時計を素材とした全10点で構成されます。2018年9月、余命3カ月を宣告された佐藤は外出もままならない身体となりました。「自宅から出れなくなって、自分が住んでいる家を改めて見ていて気になった物と、死と向かいあう中で生まれた心情が呼応して、今まで気にもしていなかった対象が愛おしく見えてきて、それらをなんとか記録したい」と考えた佐藤は、借家であった自宅が老朽化を理由に立ち退きを求められたこともあり、「誰の目も気にせずに、家と共に消えていく存在を、絵にしたい」という気持ちから、モチーフは自宅へと向かっていきました。「死神先生」では、これまでの制作方法同様、撮影したモチーフをパソコンで形をトレースしたうえで、初めて木製パネルにアクリル絵具で描いています。佐藤は、それぞれの作品一点一点にたいし、私的なエピソードを交えた短い文章を寄せており、「死神先生」を制作していた時期の佐藤の日々の生活を伺うことができます。「死神先生」は2019年2月15日（金）から、KEN NAKAHASHI（東京）で開催された個展「死神先生」で展示されましたが、佐藤はこの展覧会のさなか、3月9日に他界しました。



「死神先生」シリーズより《ヤモリ》2018年
アクリル絵具、木製パネル



「死神先生」シリーズより《now》2018年
時計

【展覧会関連 教育プログラム】

■ 蓮沼昌宏ワークショップ「つくろう！クルクルアニメーション」 and DOMANI

アニメーションの原理について学び、体験します。アニメーションの制作体験と展覧会の鑑賞を通じ、アニメーションの構造を理解し、また現代美術における表現の一形態としてのアニメーションの存在を認識させることにより、表現の多様性を知り、かつ自身でもその表現を用いることが可能であることを知る機会を創出します。

参加者が描いた絵がアニメーションとして動き出すまでの過程を体験し、最終的に当館にて上映会を実施します。

講師：蓮沼昌宏

美術家、記録写真家。1981年東京都生まれ。千葉県育ち。2005年東京芸術大学油画専攻を卒業。2010年東京芸術大学大学院美術解剖学研究室にて博士号を取得。テーマは自画像。2016年文化庁海外派遣研修制度でフランクフルト・ドイツフィルムミュージアムにて研修。絵画、キノーラ（映画以前の動画技法）の手法を用いて制作。テーマに「新しい昔話」「鳩とのフィールドワーク」などがある。記録写真家として川俣正、PortBなどのプロジェクト型作品を撮影している。現在、長野県を拠点に活動。

会場・日程：後日、当館ウェブサイトで発表します

主催：文化庁、公益財団法人水戸市芸術振興財団

文化庁新進芸術家海外研修制度と連動するDOMANI・明日展とのコラボレーション企画です。



《豊島》2018年 撮影：椎木静寧



■ 青山悟「世界にひとつだけの時計をつくろう！」

工業用ミシンで刺繍して絵を描き、近代化以降、変わり続けてきた人間性や労働の価値を問う作品を制作してきたアーティストの青山悟さんを講師に招き、刺繍や絵を描くワークショップを行います。学齢に応じて台紙に刺繍したり、絵を描いたり、身のまわりのものを貼りつけたりして世界にひとつだけのオリジナルの時計を制作します。

講師：青山悟

現代美術家。1973年東京生まれ。ロンドン・ゴールドスミスカレッジのテキスタイル学科を1998年に卒業、2001年にシカゴ美術館附属美術大学で美術学修士号を取得し、現在は東京を拠点に活動。工業用ミシンを用い、近代化以降、変容し続ける人間性や労働の価値を問い続けながら、刺繍というメディアの枠を拡張させる作品を数々発表している。

またコロナ禍において、美術館などの公共文化施設でもその活動が制限される中、当館案内スタッフ（通称：ATMフェイス）との継続的なワークショップを実施、刺繍表現を通じてスタッフの創造性や思考を刺激し、個々人が対外的に創造的な発信をすることを後押しする活動をおこなっている。

会場・日程：後日、当館ウェブサイトで発表します



■ すごろく鑑賞ガイド

ギャラリーをすごろくに見立てた本展の鑑賞ガイドを配布します。市民ボランティア8名が制作。子どもも大人も楽しめます。

編集長：林剛人丸（美術作家）

プレス向け内覧会のお知らせ

2021年11月12日(金) 14:00～15:30 受付開始13:30

場所：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出席者：井関悠（水戸芸術館現代美術センター主任学芸員）

※感染症の状況により、プレス向け内覧会の実施を見合わせる場合がございます。

※人数把握のため、ご参加を希望される場合は必ず事前にお申し込みいただきますようお願い申し上げます。また、ご来館にあたっては事前に当館HP「新型コロナウイルス感染症予防のお願い」を必ずご確認ください。

【お問合せ】

水戸芸術館現代美術センター

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120/Fax.029-227-8130 <https://www.arttowermito.or.jp/>

展覧会について：井関悠（主任学芸員）

教育プログラムについて：森山純子（教育プログラムコーディネーター）

広報・写真貸出について：鳥居加織（広報） e-mail:cacpr@arttowermito.or.jp

*詳細は公式ツイッター http://twitter.com/MITOGEL_Gallery でも配信いたします。

【記事掲載についてのお願い】

- 1) 掲載にあたっては、正式展覧会名称と会期の表記をおこなってください。
- 2) 写真を掲載する場合は、写真に添付してあるキャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- 3) 誌面掲載する電話番号は、水戸芸術館代表番号029-227-8111でお願いいたします。
- 4) 掲載記事とVTRは、資料として保管いたしますので水戸芸術館現代美術センター鳥居までご送付ください。
- 5) 取材及び収録等の取材は、必ず事前にお問い合わせください。都合により取材に応じることのできない場合がございます。

【交通のご案内】

[JR] 東京駅（品川、上野発もあり）から常磐線特急で約72分～84分、水戸駅下車。駅北口バスターミナル4～7番のりばから「泉町一丁目」下車。降車後バスの進行方向に進み、すぐの交差点で大通り（国道50号）を渡り、そのまま真直ぐにお進みください。徒歩2分。

◎料金：特急片道3,890円／普通各停片道2,310円（2021年9月現在）

※ご予約・時刻表など詳しくはこちらをご参照ください。JR東日本旅客鉄道 Tel.029-221-2836

<http://www.jreast.co.jp/>

[高速バス] 東京駅八重洲南口バスターミナルのりばから高速バス「みと号」（赤塚又は茨大ルート）で約100分、「泉町一丁目」下車、徒歩2分。切符は東京駅八重洲南口バス券売機、水戸駅北口バスチケット売場でお求めください。

◎料金：東京駅～水戸駅片道切符2,120円。ツインチケット（2枚綴り回数乗車券4,000円）。（2021年9月現在）

※詳しくはこちらをご参照ください。茨城交通 Tel.029-251-2331 <http://www.ibako.co.jp/>

[お車] 常磐自動車道水戸ICから国道50号に下りて市街地方面にお進みください。約20分、国道349号との交差点「南町3丁目」（左手にみずほ銀行）で左折、2つ目の信号でまた左折してください。

そこから1つ目の信号を過ぎたところで水戸芸術館地下の市営五軒町駐車場のマークが見えてまいります。

◎駐車場料金：30分まで無料、1時間まで200円、以降30分毎100円／営業時間：7:00～23:00

※高速料金・ルートなど詳しくはこちらをご参照ください。

東日本高速道路「ドラぷら」 Tel.0570-024-024 <http://www.driveplaza.com/>